

明智小五郎像の造形とその変遷

——語と家族観の観点から——

羽 賀 英 美

はじめに

明智小五郎は江戸川乱歩（一八九四—一九六五。本名平井太郎）が創作した名探偵であり、数々の乱歩作品に登場する。明智の人物像が、遊民的なものから大衆向けのヒーローへと変化したことは、すでに松山巖^{二〇}、藤田富士男^{二一}、栗田卓^{二二}、住田忠久^{二三}らによって指摘されている。しかしその転換点についての実証的研究は乏しい。本稿は、まず当時の語の用法を調査し、「私立探偵」が職業探偵を意味することを確認する。その上で明智が登場する乱歩作品を網羅的に調査し、明智が「私立探偵」すなわち職業探偵となりヒーロー化する転換点を、具体的に明らかにする。さらに、明智が疑似的な近代家族を構築したことや、明智小五郎像構築における、文代の役割について考察する。そして、明智の本格派の探偵としての一面について考察する。作品の初出情報、乱歩以外の作者の作品の引用は文末脚注に掲載した。「明智小五郎略伝」^五以外の乱歩作品の引用は、光文社版江戸川乱歩

全集（二〇〇三—二〇〇六）によった。引用に際しては漢字を通行に改め、ルビを省略した。

第一章 語からみる明智小五郎像の変遷

第一節 新聞記事における「私立探偵」

まず、明智が初登場する「D坂の殺人事件」^{二四}以前の新聞における「私立探偵」の使用例を挙げる。

・『讀賣新聞』朝刊、一九二二年十二月五日付

悪辣な私立探偵や興信所の取締りを始める 彼等の毒牙にかゝる者が多く警視庁にも投書が飛込むので新春内務省で 法規をきめる（五頁）

引用文の後にも「どんな書生にも開業が出来る」とあり、私立探偵が悪質な営業をしていることが示されている。

・『讀賣新聞』朝刊、一九二八年三月三十一日付

私立探偵 資格体力強壯機敏なる者収入腕次第(三頁)

この記事の見出しは「学校を出た女の職業案内 長き特殊の修業を要せぬもの」というものである。「私立探偵」は、金銭を稼ぐ職業の意味で使用されていることが分かる。

以上から、明智の初登場以前から「私立探偵」という言葉が使用されていることが分かる。また、報道の内容からも「私立探偵」は金銭を稼ぐ職業の一つを指す言葉であったことが分かる。

第二節 同時代の他作家の「素人探偵」「私立探偵」の例

次に、同時代の探偵小説作家である小酒井不木、甲賀三郎、海野十三の文学作品・評論における場合についてとりあげる。まず小酒井不木(一八九〇—一九二九)の場合である。以下に評論「ヂュパンとカリング」⁽⁷⁾の引用を示す。

ポオはヂュパンのことを別に私立探偵とも素人探偵とも呼ばなかつた。(二二六頁)

カリングもまたルコックに劣らぬ変装好きである。(中略)「仕込杖」の中では、実に、彼はカリングという素人探偵とレルネルという職業的探偵の二役をつとめて読者をあツと

言わせている。(二二九頁—二三〇頁)

ここで言及されている「仕込杖」とは、サミュエル・オーギュスト・ドゥーゼ著小酒井不木訳「生ける宝冠」⁽⁸⁾の、原題である。作中では主に、弁護士であるレオ・カリングに「素人探偵」が、警察の探偵局に属しているレルネルに「私立探偵」が使用されている。この評論の中では、レルネルを「職業的探偵」と表現していることで、カリングに対して使われる「素人探偵」が、職業を表す語ではないと捉えることができる。次に甲賀三郎(一八九三—一九四五)の場合である。以下に「支倉事件」⁽⁹⁾「黄鳥の嘆き 二川家殺人事件」⁽¹⁰⁾の引用を示す。

「すっかり失敗つて了つたんです、素人探偵は駄目ですよ」岸本は頭を掻いた。(三九九頁上段)

二川重武は多く関西方面にいたから、大阪の有名な私立探偵社の社長砂山二郎が、その為には選ばれることになった。(中略)書類の中に、砂山秘密探偵社の大きな封筒があつて、(中略)探偵社の方へも、むろん少なからぬ金が、報酬の名義で送られたに相違ないのだ。(五七七頁上段)

一つ目の「支倉事件」の引用は、岸本清一郎が自分の行動の結果に対して発言した内容であり、二つ目の「黄鳥の嘆き 二

川家殺人事件」の引用は地の文である。「支倉事件」の岸本は聖書販売人をしてしたが、刑事に協力し写真館での潜入調査を行う。探偵業は彼の生業ではない。「黄鳥の嘆き 二川家殺人事件」で登場する「私立探偵社」は、金銭のやり取りがみられることから、商業的な探偵であることがわかる。次に海野十三（二八九七—一九四九）の場合である。以下に「階段」「西湖の屍人」の引用を示す。

僕は自分にかけられた濃厚な嫌疑に立腹し、どうにかして犯人をつきとめてやりたいものと思ひ、自分だけでは素人探偵になつた気で、所内の皆からいろいろの話を集めてまわつた。（二五〇頁下段）

かれ帆村なるものは、商売が私立探偵ではないか。（二八六頁上段）

一つ目の「階段」の引用は、作品の語り手である古屋恒人が、自分の行動について発言した内容であり、二つ目の「西湖の屍人」の引用は、作品の語り手である「私」が帆村莊六に対して発言した内容である。「階段」の古屋は国立科学研究所の研究助手であり、探偵業は彼の職業ではない。「西湖の屍人」の帆村は、複数の海野十三作品に登場する探偵である。作品中で帆村が自分の事務所にいる場面もあり、「私」は探偵業を帆村の

商売として捉えていることが分かる。また「振動魔」では、「私立探偵 帆村莊六」の名刺を持っている。ただ、帆村探偵は「省線電車の狙撃手」で「僕は或る本職を持っている傍、お恥かしい次第ですが、『素人探偵』をやっています」と発言しており、例外的である。

以上から、乱歩と同時代の他作家は、「素人探偵」を当該人物の生業が探偵業でない場合に用い、「私立探偵」は探偵業を職業としている場合に用いる傾向があると分かる。次に乱歩の場合を参照する。

第三節 乱歩作品における「素人探偵」「私立探偵」の例

乱歩作品における、明智以外の登場人物に対する「素人探偵」「私立探偵」の使用例を挙げる。以下に、まず「孤島の鬼」の引用を示す。

私の尊敬する素人探偵で、私が初代変死事件の解決を依頼した深山木幸吉が、早くも殺されてしまうのである。（十四頁）

彼も亦、亡き深山木幸吉と同じく、一箇の素人探偵であつたことが分つて来たのである。（二〇六頁）

一つ目の引用は、作品の語り手である蓑浦金之助の、深山木

幸吉に対する発言である。二つ目の引用は、蓑浦の諸戸道雄に対する発言である。この作品における探偵役は深山木と諸戸だが、蓑浦はどちらにも「素人探偵」の語を使用している。深山木は定職を持つておらず、諸戸は医科大学の研究室で実験に従事しており、探偵業は彼らの職業ではない。そのため、「素人探偵」とは、探偵業を生業としていないという意味を含んでいると考えられる。次に「悪魔の紋章」からの引用を示す。

中村係長にも、おぼろげに博士の考えが分つて来た。この素人探偵は何という恐ろしいことを考えるのだろうか、殆んどあつけに取られる程であつたが、兎も角愚図愚図している場合でないと思つたので、博士と共に、門前に待たせてあつた警視庁の自動車に乗り込んで、U公園の科学陳列館へ走らせた。(四四六頁―四四七頁)

葬儀の翌早朝、宗像博士の来訪が取次された。他の来客は悉く断っているのだけれど、博士だけには会わぬ訳には行かぬ。今はこの聡明な私立探偵だけが頼りなのだ。

(五三三頁―五三四頁)

一つ目の引用は、明智と懇意である中村係長の、宗像隆一郎博士に対する心情描写である。二つ目の引用は地の文で、愛娘たちを殺された川手庄太郎が、宗像を頼りにしている描写であ

る。宗像は、「法医学界の一権威」であり、「丸の内のビルディングに宗像研究室を設け、犯罪事件の研究と探偵の事業を始めからもう数年になる」という人物である。宗像に対して、右に引用した「素人探偵」一例の他は「私立探偵」が使われている。宗像が主に「私立探偵」とされるのは、彼が「探偵の事業」を行っているためだろう。つまり、ここでの「私立探偵」もまた、探偵を職業としていることを意味すると考えられる。宗像が一例のみ「素人探偵」とされるのは、視点人物である中村係長が明智に敬意を払っていることからきた表現であると考えられる。本作では、明智も麻布区龍土町に探偵事務所を構えており「私立探偵」とされている。そして宗像と明智の、探偵役としての対立関係が描かれている。つまり、ここでの「素人探偵」とは、中村係長が「私立探偵」である明智と対比して宗像を捉えていることからきた表現であると考えられる。

以上二つの作品から、「素人探偵」は、乱歩作品においても当該人物の生業が探偵業でない場合に用いられる傾向にあると言える。また、「私立探偵」には探偵業を生業としているという意味が含まれていると考えられる。

第四節 明智の「素人探偵」から「私立探偵」への変遷

明智の「素人探偵」「私立探偵」の転換期を確認する。調査には光文社版江戸川乱歩全集(二〇〇三―二〇〇六)を使用した。明智は一九二五年の「D坂の殺人事件」から一九三〇年九月―

翌年十月の「黄金仮面」^(七)まで、「素人探偵」と呼ばれていた。一九三四年一月―十一月の「黒蜥蜴」^(八)では「素人探偵」が二回、「私立探偵」が四回あり、一九三四年一月―翌年五月の「人間豹」^(九)では「私立探偵」という呼び方に統一され、その後「私立探偵」に落ち着く。明智に対して「私立探偵」の語が用いられるようになるのは「黒蜥蜴」であり、同作は明智の「素人探偵」「私立探偵」の転換点である。先に確認した語の用法から考えて、明智の呼称の変化は、明智が職業探偵となったことを示すものとして捉えることができる。また、明智が職業探偵化しているならば、ダンディズム要素の追加を代表とする明智の欧風化や裕福そうな暮らしぶりは、事業成長の結果だと言っても良いだろう。ただ、職業探偵になっても依頼人からの金銭受取の描写はみられない。これについては次の章で述べるが、本格探偵小説の探偵像からの影響であると考えられる。

藤田富士男は、明智がダンディズムにあふれたキャラクター像への転向をはじめたのは「蜘蛛男」^(一〇)であり、「黒蜥蜴」で明智小五郎像は完成したと見ている。「素人探偵」「私立探偵」の語の転換期と、遊民の明智が正義のヒーローとして活躍するようになるという変化は、いずれも「黒蜥蜴」が関係している。また、末尾で明智の結婚が示される「吸血鬼」と「黒蜥蜴」の間に挟まるのは、「黄金仮面」一作のみである。そして前述のように「黒蜥蜴」は、「素人探偵」「私立探偵」の転換期である。つまり、この転換期は明智の結婚期とも近いことになる。その

ため、明智の職業探偵化の要因は、明智の結婚であると考ええる。

第二章 明智の疑似的な近代家族

第一節 本格探偵小説の探偵であるデュパン像

本格探偵小説の「私立探偵」について確認するため、エドガー・アラン・ポーのデュパン像について述べる。谷口基は、本格探偵小説とは、犯罪に関する謎を科学的・論理的に解明する作品を指すと説明している。また、小酒井不木は先にも触れた評論「デュパンとカリング」^(一一)で、デュパン像について次のように述べている。

しかしながら、デュパンは「探偵」に必要な条件を殆んど皆、備えているといつてもよいのであつて、その後にあられた小説中の探偵は、その性格に多少の差異こそあれ、デュパンの型を脱することが出来なかつた。(中略) 後世の探偵小説家の描く探偵は、畢竟、デュパンの型を受け継ぐことになるであろう。

探偵は観察力が非常に優れねばならない。探偵は推理分析の力が異常に発達しなければならない。探偵は変装に巧みであらねばならない。(中略) これらの資格をデュパンは完全に備えているのである。(二六頁―二七頁)

デュパンは、近代探偵小説における探偵の元祖と呼べる存在であると思われる。私立探偵である明智には、デュパンからの影響があると考えられる。明智はデュパンと同じく、観察力や推理力が秀でており、変装の腕がある。また、「モルグ街の殺人」を参照すると、デュパンは独身で語り手の「私」と同居し、探偵は趣味的位置づけのものであり職業ではない。貧乏な生活を送り、親譲りの財産の残りから収入を得ている。明智も、初期のころや文代が作品世界に登場しなくなつてからは、独身らしい生活を送っている。また少なくとも初期の明智は、趣味として探偵を行っていると言つてよいだろう。また、作品本文中の表現に限つて言えば、明智本人が依頼者から報酬金を受け取る描写はみられない。明智は、デュパン的、つまり本格探偵小説的な私立探偵としての一面を持っており、特に初期の明智は、その性格が大きいと言える。

第二節 近代家族と明智一家

明智が構築した家庭と、社会的背景を照らし合わせて考える。前述のように明智と文代の結婚が示されるのは、一九三〇年一翌年の「吸血鬼」の末尾であり、家族観については一九〇〇年代前半を参照する。藤井淑渥は、明智と文代、小林芳雄少年が、疑似的な近代家族を形成していると考えられることを指摘している。さらに、明智らが過ごしたお茶の水の開化アパートの「現実との地続き性、事実性」や読者の憧れをかきたてるようなモ

ダンさは、「通俗もの娯楽ものにふさわしい対読者戦略」だと見ている。⁽⁵⁴⁾

近代家族とは何か。落合恵美子は近代家族の特徴として、家族構成員間の強い情緒的絆、子供中心主義、男は公共領域・女は家内領域を担うこと、核家族などを挙げている。また、関口裕子らは、一九〇〇年前後から、男性が家庭外で働き女性は家事育児を行う性別役割分業の形が、高級官僚・高級サラリーマンの家庭にあらわれ、一九一〇、二〇年代に広まったと示している。⁽⁵⁵⁾以上から、明智と文代が結婚した当時、家庭を支えるために稼ぎ頭となるのは夫であったことがわかる。

明智一家が近代家族の構図を取っていると仮定すると、明智は近代家族の父親役として、収入を得ているのではないか。そうであるならば、明智は結婚したために、明智の趣味的意味が大きかった探偵業を、収益のある職業としての探偵業に変えたのだと考えられる。ただ、結婚後の明智は家計を支える父親役にあたり、初期と比べて豊かな暮らしを送るようになっていくが、金銭を稼いでいることは明言されない。金銭授受の現場ではなく裕福そうな住まいの様子を描写し、職業である「私立探偵」の語を用いることで、収入があることを暗示していると考えられる。

また、実際には、明智一家は完全な近代家族を構成しているわけではない。「父、母、子ども」という構図において「子ども」にあたる小林少年に、明智と文代との血の繋がりはない。また、

文代がいなくなつたのちに登場する花崎マユミも、文代の親類ではあるが、明智と文代の子ともではない。また、明智に比べれば活躍の頻度に差はあるが、文代と小林少年、マユミもまた、探偵業に携わっている。完全に性別や親子間で役割を分けているわけではないのである。また、明智と文代について、以下に「明智小五郎略伝」の引用を示す。

明智はデュパンやホームズとちがって、美しい奥さんを持つています。彼が三十二歳の頃、東京に起つた「吸血鬼」という事件の時、彼の助手として働いた文代さんという美人と結婚しました。しかし、まだ子供に恵まれないので、文代さんは今でも、何かの折には明智の助手として働くことが出来るのです。(八十二頁)

明智と文代は夫婦であると同時に、探偵業という職業上のパートナーだった。また、始終面倒を見なくてはならないような、養育すべき子どもを持つていないことが、明智と文代の共通き状態を可能にする一因であつた。つまり明智一家は、あくまで疑似的なものであり、明智は、当時世間で構成されるようになっていた形とは、異なつた形の家族を持つたのである。これは、反近代家族性であるとも言えるだろう。またこの背景には、乱歩の本格探偵小説を理想とする意識があるのではないか。以下に「明智小五郎略伝」の引用を示す。

この蜘蛛男との一騎討ち以来、明智は広く大衆に知られるようになり、(中略)大時代の怪物を向うにまわして、チャンチャン、バラバラの大活劇を演じ、大いに喝采を博しましたが、青年時代の面白い風格は、どこかへ消えて行つて、彼の言動にはどことなく紙芝居的なおかし味をおびるようになって来ました。(八十一頁)

以上の部分について永井良和は、明智を「活劇的キャラクターに変じてしまつたことへの違和感が読みとれる」としている。⁽⁸⁵⁾ また「探偵小説四十年」⁽⁸⁶⁾の引用を示す。

「一寸法師」の予告の言葉は、純本格でないことを気にした、遠慮深いもので、当時から、私は探偵小説の本道は、論理小説にあると考えていたことがわかるような文章(二四〇頁)

乱歩が大衆向けの探偵像に対して違和感を持つており、本格探偵小説を理想としているならば、明智の完全な大衆化や通俗化を避けようとする意図があるのではないか。

第三節 明智小五郎像構築のための文代の役割

明智の妻である文代は、初登場の「魔術師」⁽⁸⁷⁾では賊の娘であつ

たが、その環境からの脱却を願ひ、明智に協力した。明智との出会いが、文代を救い出すことにつながる。「吸血鬼」では、文代は数々の働きをみせ、末尾では明智と文代の結婚が示唆される。「人間豹」では、文代は明智の「名助手」であり、明智との新婚家庭を見ることができ、「虎の牙」では怪人二十面相を欺く見せ場もある。

これらの作品からは、明智と文代の信頼関係、愛情関係を読み取ることができ、文代の活動的なヒロインとしての一面も見ることができ。しかし、その後文代は「鉄塔の怪人」で「先生のおくさん」として一度言及されるのみであり、「兇器」「化人幻戯」「黄金豹」では、胸を患い高原療養所に入っていることが明言されている。文代の登場頻度は徐々に減っていくが、これまでの夫婦関係を鑑みると、明智と文代の関係が悪化したとは考えにくい。文代本人は、明智と結婚した後、しばらくすると作品世界からいなくなってしまうと言つてよいだろう。また、文代の存在によつて、明智は推理好きの素人探偵から、情愛を持った私立探偵へと変化し、人間味を増した。また「黄金仮面」や児童向け作品を通し、明智は冒険活劇ヒーローとしての活躍もするようになる。これらは大衆読者を意識した展開や、通俗化であるように思われる。

明智の人物設定としては、独身から、反近代家族性を持った妻帯者、そしてまた独身同然という流れになる。独身状態もまた反近代家族性であるとすれば、明智は登場当初から一貫して

反近代家族性を帯びていると言える。

乱歩としては本格派の探偵が理想であり、明智小五郎像としては、初期のものが理想に近しかったと考えられる。文代の存在によつて明智の感情面が描きだされたが、恋愛と結婚という文代に付随する要素は、明智を大衆化してしまった。そのため、明智の反近代家族性を呼び戻し、妻の存在を周辺化することで、明智をもとの人物像へ修正しようとしたのではないだろうか。文代は明智の大衆迎合のため、そして明智の本格派探偵への人物像修正のため、ツールとして用いられていると言える。

おわりに

乱歩と同時代の語の用法、また乱歩作品の語の用法から、「素人探偵」は探偵業を本職としない場合に、「私立探偵」は探偵業を本職とする場合に用いる傾向があると分かった。ここから、明智の「素人探偵」から「私立探偵」への転換を、職業探偵化と捉えて読むことができる。

また、語の転換期と明智の結婚期は近く、明智の職業化は結婚と関連があると考えることができる。当時広まりつつあった家族観は、核家族や性別分業などを要素とした近代家族の構図であり、明智一家はこれを疑似的に構築していた。父親が収入を得るべき近代家族の構図の中で、明智は職業探偵になることで、家計を支える役目を果たしたと言える。

ただ、児童向け作品の連載が進むうち、妻の文代は周辺化する。反近代家族性は本格探偵小説の私立探偵に見られる要素であり、独身状態に戻ることで、明智は本格派の探偵らしい形へ回帰した。明智一家があくまで疑似的だったことと、文代が作品世界から姿を消すことは、本格派の探偵を理想とする作者の意図であると解釈した。文代は明智の人物像構築のため、便宜的に用いられている。また明智は反近代家族性を持ち続けており、それは本格派の探偵としての一面を持ち続けたことを意味する。

注

- (一) 松山巖『乱歩と東京 1920 都市の貌』PARCO出版局、一九八四年十二月
- (二) 藤田富士男「キャラクターの創造と変化―江戸川乱歩文学の魅力―」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第十四号、二〇〇五年三月
- (三) 栗田卓「忘れられた〈顔〉―明智小五郎と「日本」―」『立教大学日本文学』第一〇〇号、二〇〇八年七月
- (四) 住田忠久『明智小五郎読本』長崎出版、二〇〇九年十月
- (五) 江戸川乱歩『明智小五郎略伝』『探偵クラブ』一九五一年十一月。引用は『江戸川乱歩推理文庫60』講談社、一九八七年九月によった。
- (六) 江戸川乱歩「D坂の殺人事件」『新青年』一九二五年一月
- (七) 小酒井不木「ヂュパンとカリング」『新青年』一九二六年一月。引用は小酒井不木『探偵クラブ 人工心臓』国書刊行会、一九九四年九月によった。

明智小五郎像の造形とその変遷

- (八) 小酒井不木訳「生ける宝冠」『国民新聞』一九二五年二月二十一日―六月十九日。引用は『小酒井不木探偵小説全集 第7巻 翻訳集 (2)』本の友社、一九九二年六月によった。
- (九) 甲賀三郎「支倉事件」『讀賣新聞』一九二七年一月十五日―六月二十六日。甲賀三郎作品の引用は全て『大衆文学大系21 江戸川乱歩 甲賀三郎 大下宇陀児集』講談社、一九七三年一月によった。
- (一〇) 甲賀三郎「黄鳥の嘆き 二川家殺人事件」『新青年』一九三五年八月、同年九月
- (一一) 海野十三「階段」『新青年』一九三〇年十月。海野十三作品の引用は全て『海野十三全集第1巻 遺言状放送』三一書房、一九九〇年十月によった。
- (一二) 海野十三「西湖の屍人」『新青年』一九三二年四月
- (一三) 海野十三「振動魔」『新青年』一九三二年十一月
- (一四) 海野十三「省線電車の狙撃手」『新青年』一九三二年十月
- (一五) 江戸川乱歩「孤島の鬼」『朝日』一九二九年一月―翌年二月
- (一六) 江戸川乱歩「悪魔の紋章」『日の出』一九三七年九月―翌年十月
- (一七) 江戸川乱歩「黄金仮面」『キング』一九三〇年九月―翌年十月
- (一八) 江戸川乱歩「黒蜥蜴」『日の出』一九三四年一月―十一月
- (一九) 江戸川乱歩「人間豹」『講談倶楽部』一九三四年一月―翌年五月
- (二〇) 江戸川乱歩「蜘蛛男」『講談倶楽部』一九二九年八月―翌年六月
- (二一) 注二に同
- (二二) 江戸川乱歩「吸血鬼」『報知新聞』夕刊、一九三〇年九月二十七日―翌年三月十二日
- (二三) 竹本健治選『変格ミステリ傑作選【戦前篇】』行舟文化、二〇二一年八月
- (二四) エドガー・アラン・ポー「モルグ街の殺人」『グレアム雑誌』一八四一

- 年四月。参照は『ボオ全集第2巻』東京創元社、一九九一年九月によった。
- (二五) 藤井淑禎『乱歩とモタン』東京通俗長編の戦略と方法』筑摩書房、二〇二一年三月
- (二六) 落合恵美子『21世紀家族へ』有斐閣、一九九四年四月
- (二七) 関川裕子、服藤早苗、長島淳子、早川紀代、浅野富美枝『家族と結婚の歴史』森話社、一九九八年三月
- (二八) 落合教幸、阪本博志、藤井淑禎、渡辺憲司『江戸川乱歩大事典』勉誠社、二〇二二年三月
- (二九) 江戸川乱歩『探偵小説四十年』桃源社、一九六一年七月
- (三〇) 江戸川乱歩『魔術師』『講談倶楽部』一九三〇年七月―翌年六月
- (三一) 江戸川乱歩『虎の牙』『少年』一九五〇年一月―十二月
- (三二) 江戸川乱歩『鉄塔の怪人』『少年』一九五四年一月―十二月
- (三三) 江戸川乱歩『兇器』『産業経済新聞』大阪版日曜別刷り、一九五四年六月十三日、二十日、二十七日、七月四日、十一日
- (三四) 江戸川乱歩『化人幻戯』『別冊宝石』一九五四年十一月に第一回、『宝石』一九五五年一月―十月に第二回から第十一回
- (三五) 江戸川乱歩『黄金豹』『少年クラブ』一九五六年一月―十二月

「はが えいみ 本学卒業生」